

トラークル研究

第七号

2010年10月

トラークル協会

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方
Tel 04-7150-5782 Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

トラークルの blau について

— 1912 年夏から 1913 年春まで —

伊藤 卓立

(I)

2003 年 5 月 31 日、南大塚社会福祉会館でトラークル協会はシンポジウム「トラークルの詩における blau」を開催した¹⁾。ゴルトマンがトラークル研究叢書第 4 巻の「カタパシス」において主張する、「他のトラークル研究者たちは、・・・この点 (blau) では本質的に意見が一致している」²⁾、という定説を認めつつも、トラークルの詩的世界像を構成する基本語彙である blau の研究に歴史的展開という新たな視点を導入する事を目的としたこのシンポジウムの結果は、トラークル研究会創設十周年記念特集号「トラークル研究」第二号において次のように総括されている。

このシンポジウムは、通時的に、すなわちトラークルの詩作期間を六期に分けて時期順に詩において使用された色彩語を、トラークルにとって特別な意味を持つ blau に限定して追求したことは、その意味で画期的なことであった。・・・今まで様々な研究者が blau をはじめとするトラークルの詩における色彩語に一定の意味づけをしようとしてきたが、しかしこのシンポジウムの結果から明らかのように、各々の色彩語を一定の意味に限定することはできない。・・・トラークルの場合 blau は他の色彩語に比べて特別な位置を有し一般にポジティブな色価を持つとみなされがちであるが、ネガティブな使用例も見られる。・・・

しかし一般に期を追うごとに、特に第四期以降、次第に blau の非現実的、抽象的、象徴的使用が多くなり、多彩になっていくことは指摘できる。詩人はこの色彩語に限らないが、事実関係に囚われず、blau に様々な対象を結び付けることによってこの色彩語の持つ可能性を余すところなく発揮させえたと言える。・・・第四、五、六期においては blau は頻繁に使用され、また次第にそれが象徴的に使用されることによってトラークルの詩世界にいわば瀰漫化したと言えるだろう。したがってトラークルが「青の詩人」と称されることは否定できない³⁾。

1887 年に生まれ、1914 年に亡くなったトラークルの詩人としての創作期間は、1909 年夏から 1914 年秋までと、非常に短かった。しかし、この短期間の中には、通常であるならば、生涯かけて行うべき展開が濃縮されている、と言うべきである。そこで、当研究会は、高橋氏を中心に、トラークルにとって特別な意味を持つ blau に限定して時代区分を次のように行った⁴⁾。

第1期	1909年夏まで	6作品
第2期	1909年秋から1912年春まで	18作品
第3期	1912年夏から1913年春まで	34作品
第4期	1913年夏から同年秋まで	33作品
第5期	1913年末から1914年春まで	11作品
第6期	1914年4月から同年秋まで	17作品

筆者が担当したのは第三期であるが、この期間は **blau** の使用頻度が一番高く、それ故、「詩人トラークルの形成」という観点に立てば、非常に重要な、高橋会員の発言を借りれば、「詩の円熟していく」期間である。

ところで、この第三期に創作された 34 編の詩⁵⁾を読み進めて行くと読者の注意を引くのは、同一作品中においてトラークルの基本語彙「青」(**blau**、**bläulich**、**Bläue**)が、「鳥」、或いは、「鳥」と同一概念下に理解される言葉 (**Amsel**、**Dohle**、**Drossel**、**Vogel**、**Vogelzug**)と共に用いられている作品が少なからずある事である。事実、ヴェッツエルの編纂によるトラークルが 10 回以上使用した頻度別リストに従うと **Vogel** は 67 回、**Amsel** は 19 回、**Drossel** は 12 回も使用されているので⁶⁾、**Vogel** も **blau** と同じくトラークルの基本語彙と考えることができる。それ故、両者が同時に使用されている作品は、トラークルの詩的世界像を解明するうえで重要である事は明らかである。しかし、この点に注目した研究は、これまでのトラークル研究においてないがしろにされてきたので⁷⁾、この機会に、発表原稿に手を加え、その後の研究成果も取り入れ、**blau** と **Vogel** に注目して、トラークルの創作活動の第三期の特性を更に明らかにしたい。

(II)

まず第3期の 34 編の中で、「青」と「鳥」が同時に使用されている詩をインスブルック版に従って挙げれば、次のようになる⁸⁾。

1) Da sagt der Landmann: Es ist gut.

Ihr Abendglocken lang und leise

Gebt noch zum Ende frohen Mut.

Ein **Vogelzug** grüsst auf der Reise.

Es ist der Liebe milde Zeit.

Im Kahn den **blauen** Fluss hinunter

Wie schön sich Bild an Bildchen reiht —

Das geht in Ruh und Schweigen unter. (Verklärter Herbst)

- 2) Der trunkene Tod geht stumm vorbei und grüßt

In dunklem Käfig tönt ein **Drosselschlag**.

Aus solcher **Bläue** tritt ein rosig Kind

.....

Schon glänzt Saturn. Im Dunkel rauscht der Bach

Und leise rührt des Freundes **blaue** Hand

Und glättet stille Stirne und Gewand. (In Schenken träumend ... <Trübsinn> 2. Fassung)

- 3) Besänftigte wandeln wir an roten Mauern hin

Und die runden Augen folgen dem **Flug der Vögel**.

.....

Die Hände rühren das Alter **bläulicher** Wasser

.....

Leise und harmonisch ist ein Gang an freundlichen Zimmern hin,

Wo Einsamkeit ist und das Rauschen des Ahorns,

Wo vielleicht noch die **Drossel** singt.

.....

Lasset das Lied auch des Knaben gedenken,

Seines Wahnsinns, und weißer Brauen und seines Hingangs,

Des Verwesten, der **bläulich** die Augen aufschlägt.

O wie traurig ist dieses Wiedersehn.

.....

Der stille Gott die **blauen** Lider über ihn senkt. (Helian)

- 4) Leise **der Flug der Vögel** tönt,

Die Schwermut über deinen Augenbogen.

Dein schmales Lächeln tönt. (Rosenkranzlieder. An die Schwester)

- 5) Der Wahnsinn, der den sanften Menschen faßt.

Die alten Wasser gurgeln ein **blaues** Lachen.

.....

Andres erinnert an **der Vögel Flug**

Über dem Galgen der Krähen mystische Zeichen

.....

Charfreitagkinder blind an Zäunen stehen (Ein Teppich ...)

6) **Lange singt ein Vogel am Waldsaum deinen Untergang**

Die bangen Schauer deines braunen Mantels;
Erscheint der Schatten der Eule im morschen Geäst..

Lange singt ein Vogel am Waldsaum deinen Untergang

Die bangen Schauer deines **blauen** Mantels
Erscheint der Schatten der Mutter im spitzen Gras.

Lange singt ein Vogel am Waldsaum deinen Untergang

Die bangen Schauer deines schwarzen Mantels
Erscheint der Schatten des Rappens im Spiegel des Quells. (Gestalt die lange ...)

7) Am Abend, wenn die Glocken Frieden läuten,

Flog ich der **Vögel** wundervollen Flügen

.....

Im Wind sich fröstelnd **blaue Astern** neigen. (Verfall)

8) ... Mägde gehn

Durch feuchte **Bläue** und bisweilen sehn
Aus Augen sie, erfüllt von Nachtgeläuten.

.....

Doch immer ist das Eigne schwarz und nah.

Der Trunkne sinnt im Schatten alter Bogen

Den wilden Vögeln nach, die ferngezogen. (Ein Herbstabend)

9) Elis, wenn die **Amsel** im schwarzen Wald ruft,

Dieses ist dein Untergang.

Deine Lippen trinken die Kühle des **blauen** Felsenquells.

Laß, wenn deine Stirne leise blutet

Uralte Legenden

Und dunkle Deutung des **Vogelflugs**. (An den Knaben Elis)

10) Purpurn zerbrach der Gesegneten Mund. Die runden Augen
Spiegeln das dunkle Gold des Frühlingsnachmittags,
Saum und Schwärze des Walds, Abendängste im Grün;
Vielleicht unsäglichen Vogelflug, des Ungeborenen
Pfad an finsternen Dörfern, einsamen Sommern hin
Und aus verfallener Bläue tritt bisweilen ein Abgelebtes. (Stundenlied)

11) Ein Schatten gleitet beinern über'n Spiegel
Und leise taucht aus blauer Astern Schweigen
Ein roter Mund, ein rätselvolles Siegel,
.....
Ein blauer Glanz, der in den Dämmerung endet.
Der Wind klirrt leise in den leeren Gassen.
.....
Unsäglich ist der Vögel Flug, Begegnung
Mit Sterbenden; dem folgen dunkle Jahre. (Abendspiegel)

12) Am Abend trugen sie den Fremden in die Totenkammer;
Ein Duft von Teer; das leise Rauschen roter Platanen;
Der dunkle Flug der Dohlen; ...
.....
Im Nebenzimmer spielt die Schwester eine Sonate von Schubert.
Sehr leise sinkt ihr Lächeln in den verfallenen Brunnen,
Der bläulich in der Dämmerung rauscht. O, wie alt ist unser Geschlecht.
.....
Der blaue Quell zu deinen Füßen, geheimnisvoll die rote Stille deines Munds,
Umdüstert vom Schlummer des Laubs, dem dunklen Gold verfallener Sonnenblumen.
Deine Lider sind schwer von Mohn und träumen leise auf meiner Stirne.
Sanfte Glocken durchzittern die Brust. Eine blaue Wolke
Ist dein Antlitz auf mich gesunken in der Dämmerung. (Unterwegs)

以上を概観すると肯定から否定への決定的な転換が現れるのは十七番目の詩 "Gestalt die lange..." に於いてである。即ち、ここに於いて「鳥」の形象は明らかに「死」へ至る「没落」を予言する存在となり、「青」は「黒」に飲み込まれ、その存在の喪失が示唆される。

(Ⅲ)

そこで先ず第3期の第2番目に置かれた詩 "Verklarter Herbst" に注目したい。

Gewaltig endet so das Jahr
Mit goldnem Wein und Frucht der Gärten.
Rund schweigen Wälder wunderbar
Und sind des Einsamen Gefährten.

Da sagt der Landmann: Es ist gut.
Ihr Abendglocken lang und leise
Gebt noch zum Ende frohen Mut.
Ein Vogelzug grüßt auf der Reise.

Es ist der Liebe milde Zeit.
Im Kahn den blauen Fluß hinunter
Wie schön sich Bild an Bildchen reiht —
Das geht in Ruh und Schweigen unter. (HKA-I, 37)

この詩を支配しているのは総て肯定的な形象である。即ち、"Mit goldnem Wein und Frucht der Gärten" は、秋の豊かな実りを表し、"Rund schweigen Wälder wunderbar" は、穏やかな自然のすばらしさを表し、"Wälder... sind des Einsamen Gefährten" は、人間に対する自然の優しさを表し、"Da sagt der Landmann: es ist gut" は、労働した人間の心からの充足感を表し、"Ihr Abendglocken lang und leise / Gebt noch zum Ende frohen Mut" は、人間に対する超越界からの祝福を表し、"Es ist der Liebe milde Zeit" は、四海に満てる慈愛の時を表し、"im Kahn den blauen Fluß hinunter / Wie schön sich Bild an Bildchen reiht — / Das geht in Ruh und Schweigen unter." は、穏やかな自然の風景の美しさを表している。

この場合、blau は自然界の川の澄んだ美しさ、濁りなさ、清らかさをあくまでも肯定的に示し、"Ein Zugvogel grüßt auf der Reise." といわれている「渡り鳥」は、人間に「挨拶を送る」、即ち、人間を肯定する存在として描かれ、生命の否定を意味する冬の到来を予感させ、後に残される人間の「滅び」を露わにする形象として描かれていない。それ故、トラークルの基本用語である「青」も「渡り鳥」も共にあくまでも肯定的に扱われている事が、第3期の初期の段階を特徴付けている。

ところが、第3期も終わりに近づくと、「青」も「渡り鳥」も全く反対の様相を見せて来る。この関連に於いて先ず注目されねばならないのは、第三期の終わりに創作された詩 "Abendspiegel. Afra I. Fassung" である。

Ein Kind mit braunem Haar. Schwärzliche Flammen
Verscheucht ein Schritt in feuchter Abendkühle
In dunkelgoldner Sonnenblumen Rahmen;
Ein weiches Tier versinkt auf rotem Pfühle.

Ein Schatten gleitet beinern überm Spiegel
Und leise taucht aus **blauer** Astern Schweigen
Ein roter Mund, ein rätselvolles Siegel,
Und schwarze Augen strahlen aus den Zweigen

Des Ahorns, dessen tolle Röte blendet.
Die Mauer hat ein sanfter Leib verlassen,
Ein **blauer** Glanz, der in den Dämmerung endet.
Der Wind klirrt leise in den leeren Gassen.

Am offenen Fenster welken still die Stunden
Des Liebenden. Der Wolken kühne Fahrten
Sind mit dem Pfad des Einsamen verbunden.
Ein Blick sinkt silbern in den braunen Garten.

Die Hände rührt des Wassers düstre Regung.
Ein frommer Geist reift ins Kristallne, Klare.
Unsäglich ist **der Vögel Flug**, Begegnung
Mit Sterbenden; dem folgen dunkle Jahre. (HKA-I, S. 385)

この詩の第一印象である「暗さ」と「不気味さ」の雰囲気醸し出しているのは、「茶色い髪をした子供」であり、「黒っぽい炎を追い払う足音」であり、「赤い臥所に沈むしなやかな獣」であり、「骨張った影の鏡像」であり、「沈黙する青いアスターからかすかに物音を立てて浮かび上がる赤い口と謎めいた印」であり、「真っ赤な楓の枝枝の間から輝いている黒い双眼」であり、「壁を立ち去った穏やかな体」であり、「闇に飲み込まれてしまう青い輝き」であり、「人気のない庭でかすかに金属音を立てている風」であり、「音もなく凋落して行く愛する人の時間」であり、「小径を行く孤独な人に付きまとう荒々しいむら雲」であり、「茶色の庭に落とされる銀色の眼差し」であり、「手に触れる水の不気味な動き」であり、「ガラスのように透明なものに成ってしまう敬虔な精神」であり、「筆舌に尽くしがたい鳥たちの飛行と死に行く人たちとの出会い」であり、「その後

に続く暗い年月」である。

二箇所で使用されている形容詞「青」はもはや澄んだ美しさ、濁りなさ、清らかさを肯定的に示してはいない。むしろ、詩 "Verfall" において聖母マリアさえも象徴させられた「青いアスター」はむしろ何か暗い欲望、換言すれば、インツェストまでも表象せしめる「赤い口」へと変容させられてしまっている。又、神々しさを象徴し得る「青い輝き」は闇に飲み込まれ、神聖な輝きは消滅してしまっている。そして、既に我々が検討した第三期の初期の詩 "Verkärter Herbst" に於いて自然界の「青い」、即ち、澄んだ、美しい、濁りない、清らかな流れは、第三期の後期の詩 "Abendspiegel" になると「暗い」(duster) 流れに変容させられてしまう。即ち、詩 "Abendspiegel" においてトラークルはもはや自然と調和することはできず、自分がいる世界に神聖の輝きを見出す事もできず、むしろそこに存在を脅かす不気味な兆候のみを見ている。この関連に於いて注目されねばならないのは、詩 "Verkärter Herbst" に於いて人間に「挨拶を送る」、即ち、人間を肯定する存在として描かれている「渡り鳥」が、詩 "Abendspiegel" になると、「死に行く人たちとの出会い」と全く同じく、「筆舌に尽くしがたい」否定的な存在に変容させられてしまう事である。それ故、第三期の後期になると、「青」を「青」のまま存在させることができない何事かが、「渡り鳥」を人間に「挨拶する」肯定的な存在から、「死に行く人たちとの出会い」を象徴する恐ろしい否定的な存在に変容させてしまった何事かがトラークルの内面に生じたと考えざるを得ない。その何事かが、第三期のトラークルの特性であり、これを明らかにすることが次の課題となる。

(IV)

そこで、この様に肯定的な詩的世界像を否定的な詩的世界像へと変容させた原因を明らかにする助けとして次にトラークルの伝記上の出来事に目を向けたい。

1) 経済上の困窮：トラークルの父トービアスは、1910年6月18日に死んだが、このことによって詩人を支えていた経済上の確実性が失われたことは確かである⁹⁾。

事実、困窮したトラークルは友人に借金さえした。1912年11月初旬の日付と考えられるブッシュベック宛の手紙で、「君に借りていた15クローネ」を返却するが、ブッシュベックの弟のフリードゥル (Friedl) にはまだ借金を返すことができない、と言っている¹⁰⁾。また、1913年4月3日付けのブッシュベック宛の手紙で次のようにまたもや借金を申し込んでいる。「更に50クローネを私に貸してくれるよう切に君にお願いする。・・・僕を見殺しにしないでくれ。」そして、二日後の4月5日付けのブッシュベック宛の手紙で、「もしも君が私に50クローネ貸してくれるなら、お金をできる限り早く送ってくれるようお願いする。というのも、私は本当に窮乏状態にあるのだから。」

経済的基盤を求めて、既にトラークルは1910年10月1日に一年志願兵役薬剤師¹¹⁾と

して任務に就き、翌年の9月30日に兵役を完了させ¹²⁾、その後1912年4月1日にはインスブルックの第10衛戍病院の薬局で半年間の見習い薬剤師としての勤務を始め¹³⁾、同年「12月1日付けで労務省の職に任ぜられた」¹⁴⁾トラークルは、現役から予備役になるために4ヶ月間の猶予を得て、許可されたリミットである同年12月31日に労務省に出頭した¹⁵⁾。それにもかかわらず、翌年1月1日付けで、即ち1日も実務に就かないまま、「会計見習いとしての職務の辞職を求める」¹⁶⁾辞職願を労務省に提出した。その後トラークルは、1913年1月後半の日付と推定されているブッシュベック宛の手紙で、アルゲマイネ病院に薬剤師の職があるかどうかシュヴァーブに聞いてみてほしい、と依頼している。しかし、アルゲマイネ病院で働く可能性をあきらめ、1913年3月18日にウィーンの陸軍省の会計見習いの地位を求めて申請書を提出した結果¹⁷⁾、同年7月15日から同職に勤務することになった¹⁸⁾。しかし、この地位もトラークルに安定した生活基盤を与えることができなかった。1913年7月16日から18日に書かれたと推定されている、ブッシュベック宛の手紙でトラークルは次のように書いている。「私はここでは無給の官職（陸軍省専門会計部門会計見習）についています。・・・恐らく、薬剤官吏として再びインスブルックへ転任することもできるのではないかと考えています。」しかしトラークルはこの考えをまじめに捉えてはいなかった¹⁹⁾。トラークルは、1913年8月14日付けツァイス宛の手紙で身の振り方の最終決定を次のように伝えている。「私は、だがもう宮仕えをやめました。これが、私が貴方にお伝えすることができる唯一のことです。そのほかのことは総て未決定です。」

即ちトラークルは、経済的に困窮しているのにもかかわらず、職業を放棄し、経済的困窮の中に身を置いた事が第三期を特徴付けている。

その理由：借金を申し込んだ1913年4月3日付けのブッシュベック宛の、既に引用した手紙で、「私は勤務についている。仕事、仕事 — 暇がない — 戦争万歳！」、と書いている。又、翌年1月1日付けで辞職願を労務省に提出した理由としてハインリヒは次のように書いている。「彼はウィーンにいた。しかし、ウィーンで『ヘーリアン』を完成させることができないので、このことが彼を再びインスブルックへ追い返したのだ。」²⁰⁾即ち、トラークルはウィーンで任務に就いていたなら、「仕事、仕事」で、『ヘーリアン』を完成させる「暇がない」ので、『ヘーリアン』を完成させることができる最善の地であるインスブルックへ帰った、というのである。このことは、経済的に安定した小市民的生活を放棄し、完全に詩人として生きる道を選択した、ということ、換言すれば、「『ヘーリアン』に魂を吹き込む内面の幻影の絶対的な声に従った」、ということの意味する。そして、この瞬間にトラークルは「人間達ではなく神に従う」詩人になったのである²¹⁾。

即ち、経済的に困窮しているのにもかかわらず、職業を放棄し、ただ内面の声に従って詩人の道を選択し、その他は全て犠牲にした事が第三期を特徴付けている。

2) 家庭の喪失：経済上の困窮に加えて更に決定的な事件がおこる。それは、「トービウス鉄器商店」の解散である。この事件に関して詩人は、1913年2月始めと推定されるフォン・フィッカー宛の手紙で次のように言っている。「私の母に、ザルツブルクの商店と家庭を解散する事を決意させる事件が起きました。」それがどのような出来事であったのかは明らかではないが、恐らく1913年4月1日に行われた「トービウス鉄器商店」の解散は²²⁾この年の始めから用意されていたものである²³⁾。いずれにせよトラークルはこの事件によって「家庭」という存在の拠り所を失った。後年トラークルは存在のよりどころの喪失を詩 "Frühling der Seele" において次のように詩的形象化を行っている。

Es ist die Seele ein Fremdes auf Erden. (HKA-I, S. 141)

この詩は第五期に属するが、我々はここに存在の拠り所を失ったトラークルの姿を認識することができる。「家庭の解散」とはトラークルにとって現実の生活の場の喪失であると同時に、魂の存在の場の喪失でもあったのだ。

即ち、「家庭の解散」と魂の存在の場の喪失こそが第三期を特徴付けている。

3) 妹の結婚：1912年7月17日妹のグレーテがランゲンとベルリーンで結婚した²⁴⁾。グレーテは近親相姦が疑われる相手であり²⁵⁾、トラークルは妹を1909 / 1910年に麻薬へ誘惑し、その結果妹を生涯中毒から抜け出ることができないようにさせてしまった²⁶⁾。トラークルはこの妹に対して「精神的に、しかし確かにまた性的に隷属状態にあった」²⁷⁾。それ故、妹の結婚は半身の喪失でもあり、また同時にそれは、妹を正常な市民生活に戻し、「無垢の状態への回帰の希望」²⁸⁾を実現する機会でもある。このコンテクストに於いて考えれば、"Verklärter Herbst" において形象化されている"Vogelzug" は妹の「無垢の状態への回帰の希望」を表していると考えることができる。

Da sagt der Landmann: Es ist gut.

Ihr Abendglocken lang und leise

Gebt noch zum Ende frohen Mut.

Ein Vogelzug grüßt auf der Reise. (HKA-I, S. 37)

しかし、結婚して去ってゆく妹への断ちがたい情念は1913年2月15日から3月13日の間に成立し²⁹⁾、それ故、第三期後半に属する詩 "Ein Herbstabend" に於いては、"der Trunkne" や "im Schatten alten Bogen" という暗い影を伴って現れ出る。

Der Trunkne sinnt im Schatten alter Bogen

従って、妹の結婚はトラークルにとって希望と喪失の二律背反である、といえる。

即ち、妹との関連から見れば、妹の「無垢の状態への回帰の希望」と妹に対する情念の相克こそが第三期の特徴である、といえる。

4) 『詩集』の出版：一般に詩人にとって、第一詩集を出版することは詩人としてあらゆる意味に於いて重要なことである。トラークルもその例外ではなく、己の存在の総てを懸けて第一詩集である『詩集』の出版に情熱を燃やした。トラークルは、1912年2月2日付けのブシュベック宛の手紙で、「いつか私の詩集を出版したい」というブシュベックの好意に言及しているが、同年5月10日付けのブシュベック宛の手紙で、「君に予約注文用紙も送り返したい」と言っているので、ブシュベックは「トラークルの詩集を予約出版で可能にする計画」を抱いていた³⁰⁾。この詩集の予約状況に関してトラークルは1912年10月半ばと推定される手紙で次のように自虐的に言っている。

予約：インスブルック、ザルツブルク、ベルリンにおける。

希望：100人の馬鹿者、彼等が注文する。・・・ブシュベックと一人の詩人＝二人の・・・聖なる・・・愚か者。

ところでこの詩集の出版の具体化に関して、ブシュベックからトラークルに宛てた1912年12月18日付けの手紙で、「総ての原稿を私は今日アルベルト・ランゲン出版社へ送付した」、と言い、続けて、「ランゲン出版社がこの本を引き受ける」見込は大きいでしょう、という同出版社の編集者であるカルル・ポロモイゼ・ハインリヒ博士の手紙の言葉を伝えている³¹⁾。ランゲン出版社のこの編集者は、既に1912年12月12日付け、ブシュベック宛の手紙で、「できますならば、トラークル氏の詩集をアルベルト・ランゲン出版社（ミュンヘン、カウルバッハ通り91番地）に提供してくださるよう、あなたにお願い申しあげます」、と言っている³²⁾。しかし、ランゲン出版社からの返事がないことに不安を感じたトラークルは、1913年2月28日付けのブシュベック宛の手紙で、「君はまだ『ランゲン』出版社から知らせを受け取っていないのか。フォン・フィッカー氏はこの本（私の詩集）をブレンナー出版社から出版してくれるであろうか」、と心配しているが、ランゲン出版社はブシュベック宛ての1913年3月19日付けの手紙でトラークルの詩集の出版を正式に断ってきた。「残念ながら、われわれの編集監査委員会のこの様な判断に基づいて、この作品を出版する事に対して意見の一致は得られませんでした。」³³⁾

ところがクルト・ヴォルフ出版社から救いの手が差しのぼされた。ヴォルフはトラークルに宛てて1913年4月1日付けで次のような手紙を送ってきた。

私は、『ブレンナー』に発表されたあなたの詩をととても興味深く読みました。そこで、本の形での出版こそ相応しいとお考えのあなたの詩をまとめたものを私に送付して頂けないでしょうか、敢えてお尋ねする次第です³⁴⁾。

トラークルは、1913年4月5日付けのヴォルフ宛の返信に「あなたが私に対して示された親切な提案に対しまして心から感謝申し上げます」、と喜びのほどを伝えている。そして4月中に両者の間で出版契約が交わされ、トラークルは20日付けで署名し、クルト・ヴォルフ出版社は25日付けで署名している³⁵⁾。

トラークルがこの詩集の出版に心血を注いでいたことは、先ず、ヴォルフ宛での1913年4月中旬と推定される手紙から明らかである。「次のようにご配慮賜りますよう、お願い申し上げます。つまり、この本はドイツ書体あるいは中世古活字体で印刷されますように、又、本の判型を選択する場合に詩に特有な構造にできる限り注意が払われますように。」

次に、行き違いがあり、1913年4月23日付けのクルト・ヴォルフ出版社からの手紙で初めて「あなたの詩の一部が先ず当社の『最後の審判』シリーズの一冊として出版される」³⁶⁾ 事を知らされたトラークルは、同出版社宛での1913年4月27日付けの手紙で抗議して次のように言っている。「書状の内容に私は当然ながらとても啞然とさせられました。・・・そのようなことに私はもちろん絶対に賛成しません、又、拒絶します・・・」この手紙に対して、同出版社は1913年4月28日付けの手紙でトラークルに次のように返答してきた。「このささやかな出版に続いて秋にはあなたの全作品を出版したいと思っています。」³⁷⁾ そして、同出版社は最終的に1913年4月30日付けの手紙でトラークルに次のように伝えてきた。「私どもにとって大切なことは、あなたの意志に反して契約に基づいて行動することではなく、あなたの意に即してあなたに喜んで頂くよう詩集を出版することです・・・」³⁸⁾ 出版社のこの譲歩に対して、トラークルは1913年5月始めと推定される手紙で、「私は、・・・私の純粹に芸術上の理由 (rein künstlerische Gründe) から押しつけました抗議を認めて譲歩していただきましたことに対しまして感謝申し上げます。」トラークルはこの手紙の中で、次のような追伸を書いている。「詩『オパールを三度のぞく』は『空き部屋で』の後に組み入れてください。最初の場所には『少年エーリスに寄せて』を組み込んでください。」ところが、1913年5月8日付けのヴォルフ出版社宛での手紙でトラークルは上記の変更に対して更に変更を申し入れている。「詩『オパールを三度のぞく』はその元の位置のままにしておいてください。その代わりに『少年エーリスに寄せて』を『空き部屋で』の後に組み入れてください。」更に、1913年5月19日付け、ヴォルフ出版社宛の手紙でも次のように変更を指示している。「もしも、各段落を明白にすることによって、『詩編』をわかりやすくして頂けますならば、心から感謝申し上げます。もちろん、それからこの詩の(最後の)一部を49頁へ移して組んで頂きたいのです。そうしますと『ロザリオの歌』も良くなるでしょう。こうすると『ロザリオの歌』は見開き

頁に印刷されることになり、非常に効果的になります。」

これらの変更の指示は総てトラークルの「純粹に芸術上の理由」に基づくものであり、ここには『詩集』を一つの言語芸術作品として完成させようとする詩人としてのトラークルの強い意志が働いている。換言すれば、トラークルは、『詩集』を言語芸術作品として完成する事によって、詩人としての己を確立させたいのである。

即ち、第三期に於いてトラークルは自覚した詩人として第一詩集である『詩集』の出版に己の存在の総てを尽くした。

5) 時代状況：トラークルは、この時期の自己批判と時代批判を、フォン・フィッカー宛宛の 1913 年 6 月 26 日付けの手紙で次のように行っている。

あまりにもわずかな愛、あまりにもわずかな正義と同情、そしていつもあまりにもわずかな愛。あまりに多くの非情さ、高慢、そしてあらゆる種類の犯罪性、これが私なのです。確かに、私は弱さと臆病から悪事を行わず、こうすることによって自分の悪意を更に醜くするのです。魂が、呪われ、憂鬱によって汚染したこの体にもはや住むことを望まず、又、できない日の到来を、魂が汚物と腐敗からできているこの嘲笑されるべき姿を立ち去るであろう日の到来を切望する。しかしこの嘲笑されるべき姿は神なき (gottlos)、呪われた (verflucht) 世紀のまさにあまりにも忠実な似姿だ。

この手紙の文面から明らかなように、トラークルは時代を「神なき、呪われた」時代であると捉え、自分自身をこの時代の「忠実な似姿」であると見なしていた。事実トラークルは、フォン・フィッカー宛の 1913 年 5 月 12 日付けの手紙に同封した³⁹⁾、既にその表題からして我々にとって象徴的であり、意味深い詩「呪われた者達」(Die Verfluchten)において「神なき、呪われた」時代の「忠実な似姿」を次のように形象化している。

.....

Am Abend säumt die **Pest** ihr **blau** Gewand

.....

Oft sinken ihre Lider **bös** und schwer.

.....

Ein Nest von scharlachfarbnen Schlangen bäumt

Sich träg in **ihrem aufgewühlten Schoß**.

.....

... leise greift in seinen Mund die Hand

即ち、詩「呪われた者達」において暗示されているように、妹との近親相姦の地獄を生きる、或いはその幻想に苦悩するトラークルの「神なき、呪われた」時代の「忠実な似姿」があからさまに詩的に造形化されてくるのが第三期の特徴である。

(V)

「神なき、呪われた」時代は更に詩「時禱歌」(Stundenlied) に於いて詩的に造形化されている。トラークルは、フォン・フィッカー宛ての 1913 年 7 月 8 日付けの手紙で、ほぼ第三期の最後を飾る詩「時禱歌」の推敲を次のように伝えている。『「時禱歌」の新しい草稿を同封します、— 完全に闇 (das Dunkle) と絶望 (das Verzweifelte) に陥った状態を表す作品になりました。』この草稿を読んだフォン・フィッカーは、翌日の日付でトラークルに感想を伝えている。「あなたの最新の詩はすばらしいの一言です。」⁴⁰⁾ 即ち、フォン・フィッカーの絶賛は、「神なき、呪われた」時代の「闇と絶望」に生きるトラークルの魂の詩的造形が「時禱歌」において見事に結晶している事を意味する。そこで最後に、「時禱歌」の推敲の後を辿り、トラークルの第三期において最後にトラークルがたどり着いた詩的世界像の特性を明らかにしたい。

インスブルック版に従うと⁴¹⁾、第一原稿は 1913 年 5 月 6 日から 18 日の間にタイプライターで書かれ、第二原稿と第三原稿は 1913 年 6 月 20 日から上で引用したフォン・フィッカー当ての手紙の日付である 1913 年 7 月 8 日の間にやはりタイプライターで書かれ、第二原稿では第二連が六行に拡大され、また、内容的にも大幅に書き換えられたが、第三原稿では更に第二原稿に手書きで変更が書き込まれ、最終的に第三原稿に更に変更を加えたのが印刷された第四原稿になる。

ところで、HKA では⁴²⁾、ザルツブルクからフォン・フィッカーに送られた「1913 年 6 月 8 日付けの手紙 87 に添えられた推敲原稿をもってこの詩は恐らくきつと完成していたであろう」、と推定している。それ故、フォン・フィッカーは第三原稿を浄書した、いわば完成稿である第四原稿を読み、この詩は「すばらしいの一言です」、と言っていることになるが、ここではこの詩全体を扱うことはできないので、我々のテーマに沿って、第二連のみを扱いたい。なぜならば、そこでは第二原稿から新たに書き加えられた九行目において Bläue が用いられ、これに付された形容詞が修正されて行くからである。

そこで次にインスブルック版に従って第二連を引用し検討したい⁴³⁾。

第一原稿

4 Gebenedeit ist des Weibes Leib. Die runden Augen

5 Spiegeln die Glut des Sommernachmittags, die Stille des Walds

- 6 Die blaue Kühle des Weihers, ein heimlich Lebendes;
- 7 Vielleicht unsäglichen Vogelflug, dunklere Vorbedeutung;
- 8 Und schweigend hüllt sich in den blauen Mantel des Abends die Duldende.

第二原稿

- 4 Purpurn zerbrach der Gesegneten Mund. Die runden Augen
- 5 Spiegeln das dunkle Gold des Frühlingsnachmittags,
- 6 Saum und Schwärze des Walds, die Fäulnis des alten Weihers;
- 7 Vielleicht unsäglichen Vogelflug, des Ungeborenen
- 8 Pfad an finstern Dörfern, einsamen Sommern hin
- 9 Und aus hyazinthener Bläue tritt bisweilen ein Abgelebtes.

第三原稿

- 4 Purpurn zerbrach der Gesegneten Mund. Die runden Augen
- 5 Spiegeln das dunkle Gold des Frühlingsnachmittags,
- 6 Saum und Schwärze des Walds, ~~die Fäulnis des alten Weihers;~~
das Schweigen (des alten Weihers)
Ertrinken im Weiher
Ertrunknes im (Weiher)
ein sanftes Tier
(ein) rotes (Tier)^{4 4)}
- 7 Vielleicht unsäglichen Vogelflug, des Ungeborenen
- 8 Pfad an finstern Dörfern, einsamen Sommern hin
- 9 Und aus ~~hyazinthener~~ Bläue tritt bisweilen ein Abgelebtes.
verfallener

第四原稿

- 4 Purpurn zerbrach der Gesegneten Mund. Die runden Augen
- 5 Spiegeln das dunkle Gold des Frühlingsnachmittags,
- 6 Saum und Schwärze des Walds, Abendängste im Grün;
- 7 Vielleicht unsäglichen Vogelflug, des Ungeborenen
- 8 Pfad an finstern Dörfern, einsamen Sommern hin
- 9 Und aus verfallener Bläue tritt bisweilen ein Abgelebtes.

「青」と言う我々のテーマにとって重要なのは、第二原稿で書き加えられた第九行目の

"hyazinthene Bläue" であるが、ヒアヒンスの花色は現在では品種改良されて白、黄、桃、紅、青、紫と豊富である⁴⁵⁾。しかし、原種は「薄青色の花」(washy blue flowers)⁴⁶⁾であり、事実、トラークルも散文詩「啓示と没落」において、

Auch war am Fenster blau die Hyazinthe aufgeblüht ... (HKA-I, S. 168)

と言っている。それ故、第二原稿の "hyazinthene Bläue" は「ヒアヒンスの花のような薄青色」を意味するが、この青色には否定的ニュアンスよりもむしろ肯定的ニュアンスの方が強く感じられるので、「命はてたるもの」(ein Abgelebtes) が歩み出る場所を表す色彩としては違和感がある。そこでトラークルは "hyazinthen" を "verfallen" に推敲して、「青」に正反対の性格を示す「滅び」を付したのであるが、既に上で引用した詩「呪われた者達」において、「夕方ペストが彼女の青い衣を縁取る」(Am Abend säumt die Pest ihr blau Gewand) と言っていたが、第三期末の詩「時禱歌」では「神なき、呪われた」時代においては神聖を象徴する「青」でさえも「滅び」に曝されていることに明白な詩的造形を与えたのである。このことは既に、第三期だけでなくトラークルを代表する詩「滅び」において次のように言語芸術作品化されていた。

Im Wind sich frösternd blaue Astem neigen. (HKA-I, S. 59)

即ち、神性の輝きを象徴する「青」と「滅び」が融合したトラークル独自の詩的世界像の性格が明らかにされて来るのが第三期の特徴である。

(VI)

以上の論考から我々は結論として次のように言うことができる。即ち、第三期に於いてトラークルは、妹の結婚と『詩集』の出版を契機として、経済的に困窮していたのにもかかわらず、経済的な安定を求める小市民的な生活をあきらめ、「神なき、呪われた」時代の詩人として「闇と絶望」に生き、自分の新たな詩的世界、即ち、神聖を表す「青」さえも「滅び」に曝される世界を詩的言語によって創造することを決意した。換言すれば、第三期に於いて blau に否定的なものが賦与され、トラークルの blau の可能性が更に拡大したと言える。

注

1) 「トラークル研究」第2号(トラークル研究会創設10周年記念特集号)、(トラークル協会)2005年、S. 13ff.

- 2) Heinrich Goldmann: Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtung Georg Trakls. Trakl-Studien Bd. IV. (Otto Müller) Salzburg 1957. S. 29f.
- 3) 「トラークル研究」第2号、S. 15.
- 4) 「トラークル研究」第2号、S. 13~14.
- 5) 34編を挙げると次のようになる。1) Verwandlung, 2) Verklärter Herbst, 3) Rondel, 4) In Schenken träumend ..., 5) Nachtseele, 6) Drei Blicke in einen Opal, 7) In den Nachmittag geflüstert, 8) Die Kirche, 9) Im Park, 10) Melancholie, 11) Lange lauscht der Mönch ..., 12) Wo an schwarzen Mauern ..., 13) Jene singen den Untergang ..., 14) Helian, 15) An die Schwester, 16) Ein Teppich ..., 17) Gestalt die lange ..., 18) Delirien, 19) Delirium, 20) Verfall (II), 21) Ein Herbstabend, 22) Es geht ein alter Weg ..., 23) Im Dorf, 24) Die Stille der Verstorbenen ..., 25) Amen, 26) In der Heimat, 27) An den Knaben Elis, 28) Nachts, 29) Die Verfluchten, 30) Elis, 31) Stundenlied, 32) Abendspiegel, 33) Karl Kraus, 34) Unterwegs (II)
- 6) Heinz Wetzel: Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. (Otto Müller) 1971. S. 813. なお、同リストでは blau は 259 回に上る。
- 7) 以下の文献を参照した。
- Heinrich Goldmann: Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtung Georg Trakls. (Otto Müller) Salzburg 1957.
- Christoph Eykman: Die Funktion des Hässlichen. In der Lyrik Georg Heyms, Georg Trakls und Gottfried Benns. (Bouvier) Bonn 1965.
- Gottfried Stix: Trakl und Wassermann. (Edizioni di Storia e Letteratura) Roma 1968.
- Karl Ludwig Schneider: Der bildhafte Ausdruck in den Dichtungen Georg Heyms, Georg Trakls und Ernst Stadlers. Studien zum lyrischen Sprachstil des deutschen Expressionismus. (Carl Winter Universitätsverlag) Heidelberg 1968.
- Eckhard Philipp: Zu Funktion des Wortes in den Gedichten Georg Trakls. Linguistische Aspekte ihrer Interpretation. (Max Niemeyer) Tübingen 1971.
- Heinz Wetzel: Klang und Bild in den Dichtungen Georg Trakls. (Vandenhoeck & Ruprecht) Göttingen 1972.
- Evemarie Recht: Die Farbe Blau in den dichterischen Texten Georg Trakls. In: Elemente der Literatur. Beiträge zur Stoff- und Motiv- und Themenforschung. Elisabeth Frenzel zum 65. Geburtstag. In Verbindung mit Herbert A. Frenzel hrsg. v. Adem J. Bisanz und Raymond Trousson. Bd II. (Kröner) Stuttgart 1980.
- Iris Denneker: Konstruktion und Expression. Zur Strategie und Wirkung der Lyrik Georg Trakls. (Otto Müller) Salzburg 1982.
- Marie Jannus Rurrik: Georg Trakl. (Columbia University) New York & London 1974.

Gebhard Rusch u. Siegfried J. Schmidt: Das Voraussetzungssystem Georg Trakls. (Friedr. Vieweg & Sohn) Braunschweig / Wiesbaden 1983.

Jacob Steiner: Die Farben in der Lyrik von George bis Trakl. In: Internationales Georg Trakl-Symposium Albany, N.Y. Hrsg. Joseph P. Strelka. (Lang) Bern, Frankfurt a.M., Nancy, New York 1984.

Gunther Kleefeld: Das Gedicht als Sühne. Georg Trakls Dichtung und Krankheit. Eine psychoanalytische Studie. (Niemeyer) Tübingen 1985.

Hildegard Steinkamp: Die Gedichte Georg Trakls. Vom Landschaftscode zur Mythopoesie. (Lang) Frankfurt a.M. / Bern / New York / Paris 1988.

Hermann Coelln: Sprachbehandlung und Bildstruktur in der Lyrik Georg Trakls. (Die Blaue Eule) Essen 1995.

8) 高橋会員が作成した一覧表は下記の HKA に従って作成された。

Georg Trakl. Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe hrsg. v. Walther Killy und Hans Szklenar. (Otto Müller) Salzburg 1969. (= HKA)

しかし、ここでは高橋会員が作成した一覧表を踏襲しつつも、ページ数だけは下記の最新のインスブルック版に従った。

Georg Trakl. Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe, historisch-kritische Ausgabe mit Faksimilies der handschriftlichen Texte Trakls hrsg. v. Eberhard Sauer mann und Hermann Zwerschina. Band II. Dichtungen Sommer 1912 bis Frühjahr 1913. (Stroemfeld / Roter Stern) Frankfurt am Main und Basel 1995. (=Innsbrucker II)

なお、20 番目の Verfall (II) は、インスブルック版では下記の第 1 巻に掲載されているので、それに従った。

Georg Trakl. Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe, historisch-kritische Ausgabe mit Faksimilies der handschriftlichen Texte Trakls hrsg. v. Eberhard Sauer mann und Hermann Zwerschina. Band I. Dichtungen und journalistische Texte 1906 bis Frühjahr 1912. (Stroemfeld / Roter Stern) Frankfurt am Main und Basel 2007. (=Innsbrucker I)

9) Vgl. Christa Saas: Georg Trakl. (Metzler) Stuttgart 1974. S. 38.

10) Vgl. HKA-II, S. 502.

11) Hans Weichselbaum: Georg Trakl. (Otto Müller) Salzburg 1994. S. 90.

12) Vgl. Saas, S. 38f.

13) Vgl. a.a.O., S. 39

14) Br. a. Buschbeck v. erste Hälfte November 1912.

15) Vgl. HKA-II, S. 552 u. 558.

16) HKA-II, S. 696.

17) Vgl. Br. an Buschbeck v. Ende Mai / Anfang Juni 1913.

- 18) HKA-II, S. 590f.
- 19) A.a.O., S. 593.
- 20) Karl Borromäus Heinrich: Die Erscheinung Georg Trakls. In: Erinnerung an Georg Trakl. Zeugnis und Briefe. 3. erweiterte Auflage. (Otto Müller) Salzburg 1966. S. 108.
- 21) A.a.O.
- 22) HKA-I, S. 492.
- 23) HKA-I, S. 567.
- 24) Vgl. Otto Basil: Geork Tragl. Selbstzeugnis und Bilddokumenten. (Rowohlt) Reinbek bei Hamburg 1965. S. 76, 161; Saas, S. 46; Weichselbaum, 105.
- 25) Basil, S. 13, 15f. 34, 71, 78.
- 26) Saas, S. 37.
- 27) Basil, S. 78.
- 28) Basil, S. 15.
- 29) Vgl. Insbrucker I, S. 376.
- 30) HKA-II, S. 550.
- 31) HKA-II, S. 751.
- 32) HKA-II, S. 684.
- 33) HKA-II, S. 686f.
- 34) HKA-II, S. 789.
- 35) HKA-II, S. 687f.
- 36) HKA-II, S. 791.
- 37) HKA-II, S. 792.
- 38) HKA-II, S. 794.
- 39) Vgl. Insbrucker II, S. 437.
- 40) HKA-II, S. 763.
- 41) Insbrucker II, S. 456f.
- 42) HKA-II, S.138.
- 43) Insbrucker II, S. 460f.
- 44) 括弧内の語はインスブルック版では書かれていないが、理解しやすくするために書き加えた。
- 45) 大日本百科事典 ジャポニカ 15巻、小学館 1965年。265頁参照。
- 46) Encyclopaedia Britannica. A New Survey of Univasal Knowledge. Fourteenth Edition. Volume 11. London, Tronto 1939. S. 954.

2009 年度トラークル協会春季研究発表会レジュメ

トラークルの詩におけるゲオルゲ訳『悪の華』の影響

高橋 喜郎

トラークルが、ボードレールの影響を受けていたことは、恐らく疑いの余地のないことだろう。それは、ボードレールの「Sonnet d'automne」とトラークルの「Herbst」(HKA-1 S.219)の最終連を比較することで、明らかになる。トラークルが、ゲオルゲ訳の『悪の華』の影響をどれくらい受けていたかは、言葉に関する限り、多くない。ドミニカ・イエールの指摘している〈Spleen〉の訳語の〈Trübsinn〉は、ゲオルゲ独自のものであろう。これを詩の題名として取り入れている。(HKA-1 S.48) また、caricature の訳語としてゲオルゲは spottgestalt を用いていて、この語をトラークルは、「Dämmerung」(HKA-1 S.48)に使用している。ゲオルゲ訳では、finster や finsternis が 11 回と多用されていて、トラークルの語法に影響を与えた可能性は、否定できない。

ヴァイクセルバウムがトラークル伝の中で立証しているように、詩人は、10 年以上の期間に渡りフランス人の家庭教師にフランス語を習っていたので、フランス語も堪能だったはずである。また、ボードレールが多義的な言語用法で知られた詩人であることも考え合わせると、トラークルがボードレールを原典で読んでいなかったとは考えられない。ゲオルゲ訳は、余りにもゲオルゲ的な訳で、ボードレールの解釈に資するとは思えない。トラークルがゲオルゲ訳の自在さに感銘を受けたことは、十分考えられるが、それだけで、ゲオルゲ訳が読まれたとは、考え難い。

トラークルがボードレールを読んでいたのは、恐らく 20 歳前後と思われる。トラークルが早熟の天才でなかったことなども考慮すると、その時点では、まだ、ボードレールのフランス語の原典から、彼の詩法を学ぶことは困難であったろう。むしろ、トラークルが、ソネットの技法をボードレールから直接ではなく、ゲオルゲ訳の『悪の華』から学んだと思われる。つまり、ゲオルゲ訳を教科書として、ソネット形式を身に付けたのであろう。

トラークルの『1909 年集』で特に目立つのは、完成されたソネット形式の詩であるが、それらは、恐らく、ゲオルゲ訳の『悪の華』の形式を借り、その中にトラークルの独自の内容を盛ったものであろう。この時期すでに、トラークルの代表作の一つと見られる「Verfall」の第一稿が成立しているのは、ある意味、象徴的な出来事であろう。

トラークルは、死の前年である 1913 年の後半に至るまでソネットを書き続けた。ゲオルゲ訳の表面的な影響は、ほんの僅かしか見られないが、ゲオルゲ訳から学んだと思われる

ソネット形式が、断続的に書き継がれていったことを考慮すると、その影響の深さは、否定できないであろう。

トラークルがボードレールから直接受けた影響が、詩の言葉の多義的な用法にあるとすると、ゲオルゲ訳からの影響は、ソネットという形式と言えるかもしれない。リルケの『新詩集』の影響を完全に否定することは出来ないにしても、ソネットという形式に関しては、ゲオルゲ訳からの影響の方が、大きかったと見るのは、必ずしも間違った断定ではないであろう。

2009年度活動報告

1. 5月30日(土)2009年度春季総会・研究発表会が南大塚地域文化創造館で開催される。

総会

(1) 本会の2008年度の決算が承認された。

トラークル協会2008年度決算報告			
自2008年4月1日至2009年3月31日			
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	165042	会場費(豊島区立勤労福祉会館)	2000
本年度会費	30000	切手代	10400
トラークル研究第五号30部 (植和田光晴)	30000	トラークル研究第五号印刷代	100000
		封筒及び書留料	2126
		会場費(岡山市勤労者福祉センター)	1040
		本年度支出合計	115566
		次年度へ繰越	109476
		(内、本年度剰余金	-55566)
合計	225042	合計	225042

(2) 「トラークル研究」第六号は10月1日発行を目的に編集する。

(3) 2009年度秋季総会・研究発表会

日時は、名古屋市立大学で開催される日本独文学会に合わせて10月17日(土)、会場は、名古屋市立大学の近辺の施設を予定。

(4) 事務局の移転

本会の事務局が 2009 年 4 月 1 日より下記アドレスに移転しました。

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方

TEL: 04-7150-5782 Eメール: saegusakouichi@yahoo.co.jp

研究発表会

保坂直之: トラークルの連作構造——共有語を通して見た「夢の中のセバスティアン」

高橋喜郎: トラークルの詩におけるゲオルゲ訳『悪の華』

2. 10月17日(土) 2009年度秋季総会・研究発表会が名古屋市のホテルいろはで開催される。

総会

- 1) 『トラークル研究』第六号について

10月1日発行予定であったが遅れて10月末に発行予定

- 2) 2010年度春季例会について

5月29日(土)に日本独文学会の行われる慶応義塾大学日吉校舎に近い公共施設を予定。

研究発表会

伊藤卓立 : トラークルと能「羽衣」一鳥の形象—

植和田光晴: 花の色 —芭蕉・蕪村とリルケ・トラークル— (続)

3. 10月31日『トラークル研究』第六号が発行される。
4. 3月25日(水) 2009年度幹事会開催される。

お知らせ

1. 2011年度春季研究発表会に発表されたい方は2月末日までに論題をお知らせ下さい。
2. 「トラークル研究」第八号に論文等を発表されたい方は2011年2月末日までにお知らせ下さい。
3. 会費未納の方は御納入のほどよろしくお願い申し上げます。

会員消息

退会者: 川添悦男

編集後記

発行が大分遅れてしまいました。お詫び申し上げます。

今年は、早いもので本会創設十五周年になります。ご協力の賜物です。

(さ)